The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	プラトン『饗宴』におけるソクラテス像の揺らぎ
Author(s)	里中, 俊介
Citation	待兼山論叢. 芸術篇. 2023, 57, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94918
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

プラトン『饗宴』におけるソクラテス像の揺らぎ

里中　俊介

キーワード：『饗宴』／ソクラテス／イメージ／揺らぎ

はじめに

プラトンの対話篇の一つである『饗宴』は、プラトン著作の中でもとりわけ幅広く読まれてきた作品である。日本においても、『饗宴』はさまざまな訳者によって、大正期に始まり、[1] その後も多くの翻訳が刊行されている。このように、『饗宴』が古代ギリシアの哲学者として一般に知られるプラトンの著作でありながら人気を博してきた要因の一つは、その内容の中心がエロースという愛の神への賛美演説ということがまず挙げられるだろう。[2] また、古代ギリシア社会を彩った当時の知識人たちが一堂に会したシュンポシオン（饗宴）という舞台設定も、その場の高揚感を伴って読み手にある種の神秘的体験をもたらしてくれるということもあるのかもしれない。また、各登場人物の特徴的な振る舞いについての描写が豊富であり、有名な喜劇詩人アリストパネスの「しゃっくり」や、後半のアルキビアデスの宴会場への乱入など、作品展開に起伏を加えることで、哲学的議論のみに終始せず、劇的な見どころも持ち合わせているということができるだろう。

その一方で、こうした舞台設定や登場人物たちの振る舞いの特殊性は『饗宴』という作品を理解することに困難をもたらしている要因でもある。とりわけ『饗宴』は他のプラトン対話篇にはほとんど見られない2重の間接的報告という形式によって物語の外殻が形成されている。具体的には、ソクラテスらが集い、エロース談義に花が咲いたアガトン邸での祝宴は、その場にいたとされるアリストデモスから時を経てアポロドロスへ語り継がれ、そのア

ポロドロスによって今改めて報告されるという体裁なのである。また『饗宴』の冒頭では、アポロドロスが報告に至る経緯までもが詳細に語られており、エロースに関する演説が始まるに至るまでにもエロースについての哲学的考察には一見関係しないと思われる種々の事情が読者に提示されているのである。

すでに筆者は、『饗宴』における2重の間接的報告という形式が採用された意図について、多様な観点からの「語り」によって作品内において重層的にソクラテス像が提示され、登場人物によって直接描写されるものとは異なる視点からの理解を読み手に促すという効果について別稿にて指摘した。[3)] その際には、『饗宴』における「報告的語り」という形式面に重点を置いたが、本稿では読者に提示されるソクラテスのイメージの「揺らぎ」に着目し、『饗宴』の登場人物の性格や描写される行動といった内容面から、『饗宴』の構成の意図の一端を明らかにしたい。

1. ソクラテスとの距離

まずは『饗宴』におけるソクラテス像形成に重要な役割を果たしているアポロドロスとアリストデモスという二人の語り手の性格に注目したい。『饗宴』はプラトンの対話篇では例が少ない2重の間接的報告という語りの枠組みが採用されていることはすでに述べたとおりである。再度確認すれば、アガトン邸での祝宴においてソクラテスらが繰り広げたエロース賛美演説ならびに、後に乱入したアルキビアデスによる演説の様子が、その場に居合わせたアリストデモスから後年アポロドロスに伝えられ、アポロドロスによって再度語られるという体裁である。ソクラテスが参加した祝宴の伝承に関わるこの二人の語り手、つまりアリストデモスとアポロドロスは一見してそれとわかるほどに明瞭なソクラテス信奉者として描かれている。まず、アポロドロスについては祝宴についての話を始める前に自身で以下のように語っている。

引用1[4)]

「（前略）ぼくがソクラテスと親しく付き合い始めて、あの人の語ることなすことのすべてを知ること、これを日々、自分の関心ごとにするようになってからまだ三年にもならないのだよ。ところであの人と付き合い始める前のぼくはといえば、行き当たりばったりに気の向くままあちらこちら走り回りながら、しかもそれでいて、自分では何かをしているつもりでいたのだが実際にはぼくは、だれよりみじめな人間だったのだ、そう今の君に劣らずね。何しろ君ときたら、哲学する（φιλοσοφεῖν）くらいなら何でも他のことをすべきだと思っているのだからね。」

（172C-173A）

引用2

「実際僕という人間は、ほかの折でもそうなんだが、哲学に関する話（περὶ φιλοσοφίας λόγους）となると、ぼく自身が話そうとあるいはほかの人から聞こうと、その話から利益が得られるなどといった考えから離れて、ただもう、それだけでとても楽しいんだ。けれども、何かこれとは別の話となると、つまり、とりわけ君たちがしているような、裕福で、金儲け仕事をする人たちの話となると、ぼく自身嫌気がさすばかりか仲間の君たちをあわれんでしまうんだ。なにしろ、君たちは何もしていないのに、自分では何かしているつもりになっているのだからね。」

（173C-D）

これらの発言から明らかなように、アポロドロスはソクラテスとの出会いによって哲学するということに目覚め、哲学すること自体に喜びを感じていることを明言している。そして、その際には何らかの「利益」が得られるかどうかといった打算的な目論見はなく、裕福であるとか、金儲けといった世俗的関心からは解放されていると自負しているようである。また、以下のようなアポロドロスに対して発せられた言葉からは、アポロドロスの関心がソク

ラテスという一個人へと集約されていることを見てとることができる。

引用3

「いつも相変わらずだね、アポロドロス。というのも、君はしょっちゅう自分自身や他人のことを悪く言うばかりで、ソクラテスを除けば（πλὴν Σωκράτους）、君をはじめとして、およそだれもがみじめであると考えているように、そんなふうにぼくには思えるからね。いったいどこから君が「気の弱い人」などと呼ばれ、そうしたあだ名までつけられたのか、ぼくとしては理解に苦しむね。なぜって、話をする場合にはいつでも君はそんな態度で、ソクラテスを除けば（πλὴν Σωκράτους）、君自身に対してもほかの人たちに対してもきつくあたるんだからね。」

（173D）

アポロドロスにとって、哲学とはそのままソクラテスの言動を意味していると言っても過言ではないだろう。であるからこそ、作中でアポロドロスはソクラテスについて語るのに「最もふさわしい（δικαιότατος）」（172B）人物と形容されているのである。

このようなアポロドロスに関する描写からは、哲学的野心に燃え、ソクラテスの徒としてその言動を語り継ごうとする性格を読み取ることも可能であり、アポロドロスの姿に著者であるプラトン自身が重ねられているという見方をとる研究者もいる。[5] そのように考えれば、『饗宴』という作品はプラトンによる「プロトレプティコス・ロゴス（哲学のすすめ）」[6] であって、祝宴で語られたソクラテスの言説がアポロドロスを通じて報告されるのも、その内容が真にソクラテス的（哲学的）なものであることを証しするためであると考えることもできる。アポロドロスの人格は読者をソクラテスへと導く橋渡し役として最適というわけである。

しかしながら、アポロドロス自身がその大言壮語に比して、まだソクラテスと付き合い始めて3年にもならないと告白しており、アポロドロスの哲学

への習熟度合いについては未知数である。[7] また、アポロドロスはソクラテスとの交友関係を利用して、自分がアリストデモスから聞いた内容をソクラテス本人に確認したと述べている。この「ソクラテスによるお墨付き」という事態は、一見して確かにアポロドロスがこれから語ろうとする内容の真実性が保証されていることを読者に対して印象付けるかもしれない。しかし、アポロドロスがソクラテスの信奉者であることやソクラテスへの本人確認という事柄は、あくまで『饗宴』内部での作劇上の設定にすぎず、その描写自体が果たす役割は読者への一定の先入観の形成や印象付けに止まるはずである。したがって、アポロドロスの性格設定が『饗宴』の内容の真実性、あるいは、アガトンの邸宅で行われたという祝宴そのものが歴史的事実であったかどうかは定かではないが、仮にそれが事実であったとしても、その歴史的事実性を担保していると考えるには疑問の余地が大きいと思われるのである。

さて、ここまで見てきたように、『饗宴』の語り手のひとりであるアポロドロスは、一見すると読者をそれこそが人間がなすべき価値ある営みとして哲学へと導き、その体現者であるソクラテスへと接近させてくれるような立ち回りをしている。この点に関して、Roweはむしろ、このような『饗宴』の内容に関する真実性の強調やソクラテスを用いた入念な権威付けのプロセスが、逆にその権威の虚構性をあらわにすることになっていると指摘している。[8] つまり、著者であるプラトンは、自らの言説がソクラテス的真実を含むものであることを証明するためにアポロドロスの取った行動のプロセスそれ自体を作品中に描くことで、むしろそれが虚構として作品内で成立しているものにすぎないということを読み手に示しているというわけである。だとすれば、読み手は安易にアポロドロスの言葉をそのまま信用して、ソクラテスの真の姿に接近できると考えることは許されないということになる。つまり『饗宴』におけるアポロドロスの性格付けとその行動によって、読み手はソクラテスへと導かれ関心を喚起させられると同時に、実はソクラテスに容易に接近できるという保証はどこにもないということを自覚させられるという

状況が生じるのである。このような、いわば、読み手とソクラテスの間に生じる距離の問題について、『饗宴』内の異なる箇所でも同様の事態が生じるということを見ていきたい。

2. 真実性と虚構性の狭間

すでに述べたように、『饗宴』はアポロドロスがアリストデモスから聞いた内容を再度物語るという2重の間接的報告である。また、これも前述したことであるが、アリストデモスもまたアポロドロスに劣らずソクラテスへの関心が高かった人物とされている。具体的にはアポロドロスが次のようにアリストデモスの人物像について述べている。

引用4

「ぼくに話した人というのは、ほかでもない、ポイニクスに話したのと同じ人物なのだ。アリストデモスとかいう人だったが、キュダテナイオン区の住人で、身は小柄、いつも裸足でいる男（ἀνυπόδητος ἀεί）だ。彼がその会合に出席していたわけだが、ぼくの見るところ、彼はその当時最も熱烈にソクラテスを愛するもの（エラステース）（Σωκράτους ἐραστὴς）たちの一人だった。」

（173B）

このように、アリストデモスもまたソクラテスの信奉者であり、「いつも裸足でいる」というソクラテスの特徴を自ら模倣することすらしている。こうした人物設定はアポロドロスと共通しており、ソクラテスに関わる報告者として適切な人物が配されており、その話の信憑性を裏付けている考えることもできる。しかし、他方でこの語り手二人の介在は読者が直接ソクラテスらの会合の現場に参入することを阻む要因にもなる。[9] 実際『饗宴』においては、間接的報告の経緯が語られる序盤だけではなく、すでに指摘がなされている

ように、中盤以降もアリストデモスの語りをアポロドロスが繰り返しているということが間接話法によって要所で示されている。[10] このようにして、語り手が常にその存在を主張することによって、読み手はソクラテスやその場に直接居合わせた人物たちとの距離を意識せざるを得ないのである。

また、この二人の語り手が作り出す間接性は単に他者が介在するという意味においてソクラテスへの距離を生み出しているだけではない。アリストデモスが直接見聞きしたとされるアガトン邸での祝宴にアポロドロスが参加できなかったのは、それがまだ「子供のころの出来事」（173A）だったからであり、祝宴が実際行われた時とアポロドロスがいま語ろうとしている時との間にはある程度の時間的間隙があるということになる。具体的には、アガトンの祝宴は紀元前416年のことであると推定され、[11]「アガトンがアテナイを離れてからもう何年にもなる」（172C）などの描写から、『饗宴』内での「現在」は紀元前5世紀の最後の数年以内であろうというのが研究者間ではある程度共有された見解となっている。[12] もちろんソクラテスは存命であるが、ソクラテスがアテナイの法の裁きによって刑死する紀元前399年が目前に迫っている状況でもある。これに加えて祝宴に集った主要人物としてアルキビアデスの名前がアポロドロスによって告げられることで、プラトンは登場人物たちが後に辿る数奇な運命、とりわけソクラテスの死を想起させる手法として、アリストデモスからアポロドロスへという十数年の時間を挟んでなされる語りという設定を用意したのではないかというのが、複数の研究者が指摘していることである。[13]

もしそうであるとするならば、プラトンがソクラテスの死を読者に想起させようとするのはなぜだろうか。これは、単に歴史的悲劇への感傷を引き出すための手段ではないのではないか。おそらくここで重要なのは、ソクラテスの刑死が意味するものが「ソクラテスの不在」であるということである。『饗宴』の読者はソクラテス死後の世界を生きており、それは著者プラトンにとっても同じであったはずである。アリストデモスからアポロドロスへとソクラテスに関する言説が引き継がれる間にもソクラテスの死期は背後に迫

りつつあったのであり、アポロドロスがソクラテス自身に直接会ってアリストデモスの話の内容を確かめるという方法は、読者はもちろん、プラトン自身にとっても「ソクラテスの不在」によってすでに不可能なのである。アポロドロスの伝える話の内容の真偽を再度ソクラテスに確かめるという行動はすでに反復不可能であって、『饗宴』内部でのソクラテスと他の登場人物とのこうした関係の描写こそが『饗宴』外部におけるソクラテスの不在を際立たたせているということができるだろう。ここにおいて、読者はソクラテスとの隔たり、ソクラテスの死によって否応なく生み出されたソクラテス自身と自らとの距離を実感せざるを得ないのである。

しかしながら、アリストデモスとアポロドロスによる語り継ぎの行為は、それがソクラテスとの埋められない時間的、空間的距離を現出させると同時に、死によって不在となったソクラテスの言動を救い出す行為でもある。もちろんアリストデモスやアポロドロス自身はそのことに対して自覚的ではない。彼らにとって、ソクラテスの死は全く予期しない未来の出来事だからである。アポロドロスが、自らが聞き知ったソクラテスに関する言説を披露する様子にはソクラテスの死を予期しているような切迫した様子は特に感じられない。しかし、『饗宴』の語り手たちによってソクラテスに関する記憶は紆余曲折を経て確かな仕方で保存され、[14]読者をソクラテスへと導く記憶装置として幾度も再生されるのである。

このように、『饗宴』の「語り」を構築するための舞台設定や語り手の存在は、読者をソクラテスへと導く仕掛けとソクラテスとの断絶、あるいはソクラテスと読者の間の距離感を自覚させる仕掛けとが構造的にせめぎ合っている。『饗宴』の2重の間接的語りの枠組みに関する解釈者の評価が、朴が指摘するように反対の方向に分かれる傾向を有するのもこのためであると考えることが出来るだろう。[15]例を挙げれば、Buryは『饗宴』の語り手二人の存在が意味するものは内容の真実性の強調にあるとの解釈を示したが、[16]先述したようにRoweはむしろその反対の虚構性を露にしているとみなすのである。『饗宴』における描写は、このいずれの解釈に対しても決定的な判断を

下せる材料を提供していない。したがって、『饗宴』の読者はソクラテスの真実に対する焦点を定めることが困難な状況に置かれ、ソクラテスへと接近しているのか、むしろ遠ざけられているのかの判断が出来ない宙吊りの状態に置かれることになるのである。

3. 新しいソクラテス

さて、このような語りの枠組みと状況設定によって生み出される読者とソクラテスとの距離の問題は、『饗宴』内部のソクラテス自身に関わる描写からも見てとることができる。『饗宴』はプラトン対話篇中でもソクラテス自身に関する描写が豊富なことでも知られているが、問題はそのソクラテスが必ずしも「通常のソクラテス」というわけではない点にある。

『饗宴』はアポロドロスが話を始める経緯が語られる導入部分に続き、アリストデモスとソクラテスが道端で偶然出会ってからアガトン邸へと連れ立って赴くまでの描写が始まる。この第2の導入とも言える場面の描写は以下のように始まっている。

引用5

「すなわち、アリストデモスは、次のように話してくれたのだった……風呂上がりにサンダルをはいた（λελουμένον τε καὶ τὰς βλαύτας ὑποδεδεμένον）ソクラテス、こうしたことはめったにしたことがない（ὀλιγάκις）のだが、こんな姿のソクラテスが、たまたまこのぼくに出くわしたのだ。」

（174A）

下線部の描写に明らかなように、これはアリストデモスにとっても、またおそらく読者にとっても意外なソクラテスの姿である。すでに引用4で前置きがなされていたように、「通常のソクラテス」はアリストデモスが真似をしている「裸足」がその大きな特徴の一つとなっている。[17] つまり、ここに現わ

れたソクラテスは「例外的なソクラテス」ということになる。『饗宴』において、初めて読者の前に現れたソクラテスが「例外的」であるという事実は、何を意味しているのだろうか。

Giannopoulouはこの第2の導入場面で描かれるソクラテスの身体的特徴や、種々の行動がアポロドロスやアリストデモスと対照的関係にあることを指摘している。つまり、普段とは異なる身ぎれいな装いでいることや、前日は人込みを恐れていくのをやめた（174A）アガトンからの招待に応じること、また、本来招待されていないアリストデモスをアガトンの祝宴に赴くよう導くことなど、こうした一連のソクラテスの行動は過去の約束や同意にとらわれず、自身に関するイメージや社会的なしきたりから外れる行為であり、それは既存の秩序を壊すことで何か新しいものを生み出す創造的行為であるという。[18] ここに現わされたソクラテス像は、過去の出来事を繰り返し語るだけのアポロドロスやソクラテスに従順に付き添うだけのアリストデモスらの態度と対照をなしているということである。そうだとすれば、『饗宴』において、最初に舞台に登場する「美しいソクラテス」は、自らに与えられた典型的イメージを、自らの手で打ち壊していく「新たなソクラテス」を象徴しているということができるだろう。

ただし、ここで留意すべきは『饗宴』におけるソクラテス像は必ずしも「新しいソクラテス」だけではないということである。アリストデモスと共にアガトン邸と向かう道中で、ソクラテスは物思いに耽りはじめ、アリストデモスは結局一人でアガトンに出迎えられることになる。ソクラテスはなかなかやってこず、アガトンはしびれを切らして召使にソクラテスを呼びにやろうとするのだが、アリストデモスは次のように述べてアガトンを押しとどめている。

引用6

「けっしてそんなことはせずに、あのかたをそのままにしてやってほしい。というのも、これはあのかたがもっている一種の癖（ἔθος）なのですから。時々、あのかたは床であろうとおかまいなしに、ひとり離れて

じっと立っていることがある。しかし、ぼくの思うに、あのかたはまもなくこちらに来るでしょう。だから、邪魔をしないでそっとしてあげてほしい。」

（175B）

下線部におけるアリストデモスの物言いは、一人立ち尽くして物思いに耽るソクラテスが、アリストデモスの良く知るソクラテスであることを示している。ここでは、その旧来のソクラテス像はソクラテス信奉者であるアリストデモスによって守られ、『饗宴』の読者の前には先ほど言及した「新しいソクラテス」とあわせて、新旧のソクラテスのイメージが入り交じるようにして提示されている。初登場時に現れた「新しいソクラテス」の姿に対して、そのすぐ後には、見慣れた「通常のソクラテス」の有するイメージが立ち現れて来るのである。ここにおいて、『饗宴』のソクラテス像は、いわば新旧のイメージの間を揺らいでいるのである。

4. ソクラテス像の不確定性

こうしたソクラテス像の揺らぎは、『饗宴』のほかの場面においても指摘することができる。周知のように、『饗宴』の中心はその名の通り古代ギリシアの「シュンポシオン」[19]を舞台として、アガトン邸に集った者たちが神としてのエロースへの賛美演説を繰り広げるというものである。その方法は、円形あるいは矩形に並んだ寝椅子の端から順番に、一人ずつがエロースを賛美するというもので、[20]参加者の一人であるパイドロスによって提案されたものである。従って、その場では登場人物同士の対話ではなく、一人語りの演説方式でエロースにまつわる様々な言説が披露されていく。ソクラテスもこのやり方に同意しているため、他のプラトン対話篇にみられるような登場人物同士の対話的言論のやり取りは採用されていないのである。この展開においては、エロースについての独自の演説をなす新たなソクラテス像への期待

感が醸成されていると言っても良いかもしれない。

他方で、4人目のアリストファネスの演説が終わったところで、残ったアガトンとソクラテス二人の間で対話が開始されそうになる場面が訪れる。しかし、ここでもパイドロスが次のように二人に割って入る。

引用7

「親愛なるアガトンよ、君がソクラテスに答えるなら、もはやこの人にとっては、ここで行われていることの何がどうなろうとまったくお構いなしだ。この人には自分と対話してくれる（διαλέγηται）相手がいるだけで、とりわけ美しい相手がいるだけでよいのだ。一方、ぼくはといえば、ソクラテスが対話する（Σωκράτους διαλεγομένου）のを聞くのは楽しいけれども、今のぼくにとっては、エロースへの讃歌に配慮し、君たちのひとりひとりから聞くべき話を受け取る必要がある。だから君たちめいめいがこの神にしかるべきものを返したうえで、そのようにしてはじめて対話してもらうことにしよう（διαλεγέσθω）。」

（194D）

この発言の中でも繰り返される「対話」という言葉が、相手の無知を白日の下にさらすソクラテス的対話を強く意識したものであることは明白であろう。この場面では、ソクラテスは一旦得意の対話という手段を封じられてしまっているのである。それでもソクラテスは、続くアガトンが賛美演説を終えた後、今度はパイドロスに了解を得た上でアガトンとの対話を開始し、通常のソクラテス的対話が始まったかに見える。ところが、ソクラテスは「エロースが美しいものでもなく、善いものでもない」ということに同意を取り付けたところで突然アガトンとの対話を中断し、その昔、自身とディオティマという女性との間でなされた対話を思い出として語り始めるのである。

ここで注目すべきは、第一にソクラテスがたった今論駁されたアガトンの立場となって対話の内容が引き継がれることである。ソクラテスはかつて自

分もアガトンと同じように、エロースは美しく善いものだという考えをディオティマによって改めさせられたのだと語り、ディオティマによって提示されるエロースの本質に関する啓示的内容を自身のエロースへの賛美演説として物語る。そして、最後に次のように述べて自らの話を終えるのである。

引用8

「まさにこうしたことを、パイドロスならびに他の諸君、ディオティマは語ってくれたのだが、ぼくはすっかり納得してしまったのだ（πέπεισμαι δ᾽ ἐγώ）。そして納得したので（πεπεισμένος）、ぼくはほかの人たちにも、人間の本性にとって、この財産を得るための協力者としてエロースにまさるものを人は容易に手に入れることができない、ということを説得しようと試みているのだ。」

（212B）

ここにおいて、ソクラテスは相手の無知を暴き出すのではなく、ディオティマの教説によって説得される側の立場に身を置いている。ここには、知者を自負する相手に対して無知を標榜しながら対話を主導するソクラテスの姿はない。

続いて注視すべき第二の点は、ソクラテスとディオティマの間で交わされる会話の有する非現実性・非日常性とでも言うべき性質である。ソクラテスをエロースの本質にかかわる秘儀へと導く役割を果たすディオティマは、マンティネイアの女性とされているが、その歴史的実在性については確認されていない。[21)] また、疫病の発生を遅らせたというエピソードも紹介されるが（201D）、その事実についても確たる証拠は伝えられていない。『饗宴』に登場する人物の多くが実在した可能性の高い人物であり、アガトン邸での祝宴というものが実際に行われたかどうかは分からないものの、現在でもその年代をある程度特定できるだけの具体性を有しているのに比べて、ソクラテスとディオティマの対話は非現実的性格を有しており、パイドロスをはじめと

するエロース賛美演説を行った者たちがいる場からは遊離しているのである。

このように、『饗宴』の中心部で展開されるソクラテスのエロース賛美演説において、ソクラテスはいつものように自分が望む対話へと事を進める一方で、ディオティマとの対話においてソクラテスは対話自体を主導する立場にはない。また、ディオティマという人物の非現実性・非実在性が対話相手のソクラテスにも投影されることで、対話全体を包む雰囲気全体が非日常性を帯びている。ここでの問題はソクラテス自身のイメージもまた、日常性と非日常性が交錯する形で描写されているという点である。先述したように、アリストデモスと出会いの場面において、ソクラテスは「身ぎれいな」「サンダルを履いた」新しい姿で現れると同時に、たちすくみ瞑想にふけるという、ソクラテスを知る者たちにとっては周知の姿が描き出されていた。このように新旧両面が混在し、あるいはその両面の間で揺れ動くイメージとしてのソクラテスが、ディオティマと対話するソクラテス像にも立ち現れているということができるのではないか。つまり、『饗宴』において各人がエロースへの賛歌を捧げるという方式は、ソクラテスから対話という言論形成の手段を一旦は奪うものの、ソクラテスは自分の番になった時には巧みに対話を自らの手に取り戻す。しかし、その対話においてソクラテスは自らの立場を説得される側へと置換するとともに、ディオティマとの対話は歴史的現実の場から遊離し、ソクラテス自身も時間的・空間的に不確定な立場に置かれるのである。この時、ソクラテスのイメージは歴史的実在としてのソクラテスと虚構的存在としてのソクラテスの間を揺れ動いている。そして、『饗宴』の読者は現実に存在したソクラテスとそこに新たに付与された虚構的ソクラテスの間のどこに焦点を定めていいか判断できず、その対象との距離を測ることが困難となり、再び宙吊りの状態に置かれるのである。

結びに代えて

ここまで見てきたように、『饗宴』における語りの枠組みと舞台設定、そしてソクラテスのイメージの揺らぎは、読者とソクラテスの間に一定の距離を生み出している。そして、そこにはソクラテスに対する引力と斥力がせめぎ合いながら作用している。『饗宴』はアポロドロスの態度が示すように、ソクラテスの言動に関する話が中心的主題として我々読者に届けられるという体裁をとる。ソクラテスの言動は哲学することそのものと同一視されており、アポロドロスに言わせれば、哲学すること以外は何もしていないに等しい。そのようにしてソクラテスへの関心を誘発された読者の前に現れるのは、体を洗い、裸足ではない、見慣れぬ新しいソクラテスの姿である。また、用意された言論の場は、一人一人が順番に演説するというソクラテスに似つかわしくない舞台なのである。他方でソクラテスは馴染みの対話的手法も駆使してエロースの本質を探究する。しかし、それを主導するのは架空的人物のディオティマであり、ソクラテスはディオティマと共にアガトン邸での祝宴という現実的舞台から一時的に離脱していく。『饗宴』のソクラテスは、古代ギリシアの現実社会を生きた歴史的実在と、プラトンによって構築された対話篇内の虚構的世界に現れるイメージとの間で揺れ動き、読者がそのイメージを固定的なものとして受け取ることを拒んでいるように見える。こうした効果も、プラトンが『饗宴』の語り手やその語りの枠組み、そして舞台となるエロースへの賛歌を捧げる祝宴といった様々な要素を巧妙に配置し作品を組みたてることで意図したことの一つなのではないだろうか。

『饗宴』の最後は宴が終わり、一人家路につくソクラテスの描写で締めくくられている。アリストデモスとアポロドロスを介した一夜の夢の中の如きイメージの揺らぎの中から、ソクラテスは静かに我々をその場に残して立ち去るのである。

［註］

1） 大正 8 年に生田春月訳による『饗宴』が越山堂から出版されているが、これはシェリー（Percy Bysshe Shelley 1792-1822）の英訳からの重訳であり、シェリーが『饗宴』に付した「序」もあわせて収録されている。

2） Nehamas と Woodruff は『饗宴』がプラトン著作の中で最もよく知られ、影響を与えてきた要因として以下の 4 点を挙げている。1. エロースを主題とした多くの演説が含まれていること。2. プラトンのイデア論が明確に現れていること。3. ソクラテスの言動に関わる描写が豊富なこと。4. 芸術性にあふれた哲学的劇作品であること。Cf. Nehamas and Woodruff (1989), xi.

3） 里中俊介（2021）「語られるソクラテス　―プラトン『饗宴』における「報告的語り」に着目して―」、『アートと、そのあわいで』中西出版、308-317 頁。

4） 本稿におけるプラトン『饗宴』の引用文については、朴一功訳を用いる。引用文に付した算用数字及びアルファベットは、慣用となっているステファヌス版テクストの頁数と段落記号に対応する。なお、引用文中の下線及び括弧内のギリシア語については筆者による。ギリシア語テクストはバーネットの校訂本（Burnet, J. *Platonis Opera*, vol.2, first published 1901.）に従う。Cf. 朴（2007）。

5） アポロドロスのどの部分にプラトンが重なるかについて強調する点は異なるが、Bury，Hunter，山本らがこのような見解を取る。Cf. Bury (1909), xvi. Hunter (2004), p.27. 山本（2016）、173-174 頁。

6） 「プロトレプティコス」といわれる文学形式については田中美知太郎の論文「プロトレプティコス」が詳しい。その中ではプラトンの『エウテュデモス』のプロトレプティコス・ロゴスとしての性格が論じられている。田中（1969）を参照。

7） Hunter (2004), pp.25-26.

8） Rowe (1998), p.3.

9） Gotshalk は二人の語り手によって受け継がれた話には、語り手の性格を反映した一定のバイアスがかかっていることを指摘している。Cf. GotsShalk (2001), p.144.

10） Emlyn-jones and Preddy (2022), pp.110-111.

11） Athenaeus, *Deipnosophistai 5*. 217a-b.

12） Hunter (2004), p.4.

13） GotsShalk の見解などが典型である。Cf. GotsShalk (2001), p.142.

14） 『饗宴』においては、アリストデモスからポイニクス、そして無名の人物を通じて同じ内容が語り伝えられたものの、そのルートでは内容が十分に保存されなかったという経緯も作品内で描写されている。

15）朴（2007）、373-374 頁。
16）Bury (1909), xvi.
17）『饗宴』220bでもアルキビアデスの演説の中で、冬に裸足で過ごすソクラテスについて語られている。
18）Giannopoulou (2017), p.24.
19）「シュンポシオン」は「共に飲む」という意味であるが、ただ酒を酌み交わすだけではなく、儀礼的性格も有していたとされる。 Cf. Allen (1991), p.3.
20）Dover (1980), p.11.
21）Emlyn-jones and Preddy (2022), p.125.

［参考文献］

Allen, R.E. (1991), *The Dialogues of Plato Vol.II: The Symposium*, Yale University Press.
Bury, R.G. (1909), *The Symposum of Plato*, Cambridge University Press.
Dover, K. (1980), *Plato Symposium*, Cambridge University Press.
Emlyn-jones, C. and Preddy, W. (ed.and tr.), (2022), *Plato Lysis Symposium Phaedrus*, Harvard University Press.
Giannopoulou, Z. (2017), “Narrative Temporalities and Models of Desire”, *Plato's Symposium A Critical Guide*, Cambridge University Press, pp.9-27.
GotsShalk, R. (2001), *Loving and Dying A Reading of Plato's Phaedo, Symposium, and Phaedrus*, University press of America.
Hunter, R. (2004), *Plato's Symposium*, Oxford University Press.
Nehamas, A. and Woodruff, P. (tr.) (1989), *Plato: Symposium*, Hackett Publissing Company.
Rowe, C. (1998), *Plato: Symposium*, Aris and Phillips.
田中美知太郎（1969）、「プロトレプティコス」、『田中美知太郎全集 5』、筑摩書房、206-281 頁。
朴一功 訳（2007）、『プラトン　饗宴／パイドン』西洋古典叢書、京都大学出版会。
山本巍（2016）、『プラトン饗宴　訳と詳解』、東京大学出版会。

（人文学研究科助教）

SUMMARY

Unsettledness of Socrates' figure in Plato's *Symposium*

Syunsuke SATONAKA

In this paper, I want to show the complexity of Socrates's character in Plato's *Symposium*, and discuss the reason why Plato created the figure of Socrates, which is not found in his other dialogues.

Firstly, I try to declare the intentional creation of the narrative framework of Plato's *Symposium*. The dialogue is written as a drama which was indirectly reported by Socrates' friends, Apollodorus and Aristodemus. They are both dedicated followers of Socrates, and guide readers in the direction toward the truth of Socrates at first glance. However, the repetition of indirect speech throughout the dialogue reminds readers the existence of narrators and distance from Socrates himself. Consequently, as readers, we unable to determine the distance to the true Socrates.

My second priority is address the complex problem related to the unsettled figure of Socrates, which is present throughout Plato's *Symposium*. In this dialogue, Plato particularly gives a different type of feature to Socrates' figure. On the one hand, Socrates is depicted as a typical and historical figure, but on the other hand, he is also unusual and fictional. Therefore, it is not easy for us to capture the image of Socrates during this dialogue. However, I propose that Plato's primary purpose is to make readers of *Symposium* unable to easily understand the character of Socrates as a fixed one.